

# クワガタムシのひーちゃんの死 神理幼稚園（福岡県北九州市）

【4歳児】

（4月中旬）進級して2週間ほどがたち、新しい担任やクラス的环境にも慣れてきたが、まだまだ前クラスの友だちや保育者とのかわりを求めている子もいた。そんな中、虫好きの子が多いようで、クラスの絵本コーナーに用意していた虫の図鑑や絵本等に興味をもち、知っていることを言い合う姿がよく見られた。この虫の会話を通して友達関係も広げられそうだったので、そんな期待もあり、担任がクワガタのメス・オスとカブトムシを連れてきてクラスで飼育してみることを提案した。



（刺激）絵本コーナーに、子どもたちの大好きなクワガタやカブトムシの出てくる絵本や図鑑を用意する。

（保育者の思い）虫の好きな子が多いクラスだな！共通の興味や関心を通して友達関係が広がるといいな。知識として虫の名前や性質を知っている子も多いようだが、実際に触ったことのない子も多いようだ。クラスで飼ってみよう！



クワガタだ！この虫知ってるよ！僕の家の本にも載ってた！

飼育が始まる。毎日の観察が楽しく、興味深く見ている子が多い。

名前を決めよう！

4月中旬・担任がクワガタのメスとオス、カブトムシを連れてくる。

自分以外の友達の意見も受け入れられるといいな。個々の声に共感しながら、皆で名前を決めよう。

クワガタのオスは、大きくて強そうだから「ロック」  
メスはいつもひっくり返っているから「ひーちゃん」  
カブトムシはグランドシオカブトという種類だから「グラ！」



（刺激）・写真を撮り、名前を書いて飼育ケースの傍に飾る。  
・飼育コーナーのすぐ傍に虫の本や図鑑を用意したり提示したりする。

名前を付けたことで、より近い存在、仲間となり、子どもたちの生活に自然に入っていているようだ。名前を付けると名前前で呼ぶし、愛情がわくんだな。

本で調べたり、観察したりすることを楽しむ。本でひっくり返っているクワガタを見ると「あっ、ひーちゃんがおった！」と言う。

（6月当初）担任が子どもたちの登園前に室内の環境を整えていて、首と胴体が切れたひーちゃんを発見する。とても残酷な様子で、このまま子どもたちに見せてよいのか、様子は見せずに話だけをするべきか悩んだが、毎日観察して可愛がっていたひーちゃんなので、命の大切さも感じられる機会になればと思いそのまま見せることにした。

子どもたちなりに、自分たちの経験から、虫の思いを想像し考えているんだな。死んでしまったら元には戻らないこと等、命の大切さにも気づき、自分たちが世話をする責任も感じて欲しい。

いつも通り観察をする子どもたちだが、バラバラになったひーちゃんに驚き、しばらくの間誰も何も言えない。しかし、目を背けることなくじっとその様子を観察している。

A児「ロックが、はさんのだ？」  
担任「……………」  
K児「あっ、えさがないよ」  
A児「わかった。ひーちゃんがごはん全部食べてロックが怒ったんやない？」  
担任「そうかなあ……。けんかしてしまったのかなあ……」  
（ロックは、木の下にもぐっていた。）  
A児「だって、ロックかくれとるもん。今、ごめんなさい言う練習しよるんよ」  
担任「でも、ひーちゃん死んじゃったよ」

子どもたちの、ひーちゃんを思う優しさが嬉しい。ひーちゃんのことを忘れないように、絵を描いてみてはどうだろう？まずは、私が描くことで、子どもたちが興味をもってかわってくれるかな？又、絵を描くことで、じっくり観察し、ひーちゃんの死を受け止め、死んだら生き返らないこと、命は一つだけということも感じてくれるといいな。

後から登園してくる友達に、ひーちゃんが死んだことを説明し、観察を続ける。

A児「木のところに埋めて、お墓作ってあげよう。そしたら又、ひーちゃんになって、戻って来れるんやない？」  
H児「お墓作ってあげたら、天国に行って他の虫達と一緒に楽しく遊べるかもしれんよ」

テーブルでくっつけたら・・・という発想も分かるが、おもちゃが壊れたのとは違う、命ある虫が死んでしまったことに気付いて欲しい。テレビゲームのように死んだらリセットではない現実の世界を受け止めて欲しい。

担任がひーちゃんを描く様子に興味をもち「ロックも描いてあげたら！」「ごはんも描いてやらなよ」と言う声。  
A児「見やすいように出すね」とテーブルの上にバラバラになったひーちゃんを置き、「こうやって、テーブルでくっつけたら元にもどるんやない？」



担任の絵を見ながら、「私も描きたい」「僕も描きたくない」と何人もの子が描き始める。  
M児「Mのひいおじいちゃんも天国にいるんだよ。ひーちゃんに会えるかもしれないね」  
担任「会えるといいね」  
M児「ひーちゃんのこと飼って可愛がってくれるよ。だってやさしいもん」と話しながら、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんが、ひーちゃんを飼っている絵を描く。  
F児「Fのじいちゃんも天国におるけど、ひーちゃんは虫の国に行くんやから会えんと思うよ」  
K児「ロックが寂しくないように、ひーちゃんの絵、ケースに貼ってあげたら？」  
H児「お墓に手紙も入れたらいいやん！」

ひーちゃんへ・・・てんごくで、たくさんあそんでね。  
ろっくが、ごめんねって、いってるからゆるしてあげてね。  
たべてごめんねっていってるよ。

ひーちゃんが、天国で幸せになれるように

次の日、皆でひーちゃんのお墓を作り、大教殿裏の天狗の森に行く。  
「大きな木の傍がいいよ！」「そしたら、またひーちゃんになって戻ってこれるよね」皆で手を合わせてお参りをして、大教殿の神様にも、「天国で幸せになれるように」とお願いする。



#### <考察>

自分達の可愛がっていたクワガタのひーちゃんの死を通して、一人ひとりの子どもたちがその子なりにいろいろなことを考え、感じてくれた。子どもたちの中に、ひーちゃんが存在が大きく入っていたからこそ、ひーちゃんがどうして死んでしまったのかを考える時、その子なりの今までの経験から思いをめぐらせ想像したり、友達の意見を聞いたりする姿が見られたのだと思う。この想像力こそが、相手の思いを知ろうとする気持ち、相手を思いやる力につながっていくのではないだろうか。相手の思いが想像できずに、自分勝手な悲しい事件があふれる現代・・・。一匹の虫の死を通して、死んだら元には戻らないという現実を知り、命の大切さが子どもたちの心に響いてくれればと思う。壊れたら買い直せばいい、死んだらリセットすればいいというバーチャルの世界があふれている現代だからこそ、現実の世界をしっかりと受け止める力をつけて欲しい。

#### みどころ

子どもたちの言葉から、クワガタムシの死を受け止めようとしている様子が伝わってきます。この姿から、4歳児でも「死んでしまったことには、何か理由がある」という思いや、「生きるために必要なことがある」という考えをもっていることが分かります。また、「死んでしまった悲しみを乗り越える」ために、様々な思いを表し、行動しています。この時にしか味わえない感情体験と様々な思いをもっている子ども一人ひとりを、保育者はしっかりと受け止め、思いを十分に表せるように援助していくことが大切です。